

方法として の地域研究

「地域研究」は危うい知的営為である。

それを地域研究と呼ぶか否かは別として、人が他者に、そして他者の住むその風土、文化、社会のありように目を向けるとき、その眼差しが自らの背負う歴史性から自由になることはありえない。とりわけそれが遠く離れた地の場合、眼差しを向けること自体が、他者との非対称な力関係のうえに成立していることが多い。現在「地域研究」と総称されている研究領域の出自をたどれば、その大きな水源の一つに、植民地支配を前提とする官僚や学者たちの「ネイティブス」の記述、冷戦期の戦略研究、「敵国」事情研究等々が、累々と連なっている。いうまでもなくそれは過去にとどまらず、資本であれ国家であれ、あるいは知の世界のヘゲモニーや個人的関心であれ、こうした非対称な力関係は、今も「地域研究」に関する様々な需要や思い入れのなかに見え隠れしている。九・一一以降、「中東」や「イスラーム」に関する「専門的知識」がいかに需要され消費されたかという点については、あらためて指摘するまでもな

いだろう。西欧やアメリカを対象とする研究を普遍的な学術とみなし、「地域研究」は普通の「外」を対象とする研究領域ととらえる認識もいまだに根強い。

しかし、たとえそれがいかなる力関係から出発したものであれ、他者を理解しようとする営為はそれ自体が原動力となつて、思いがけない知の世界を拓く。統治のための情報蓄積を目的とする植民地官僚の調査は、自らが持ち込んだ尺度では測ることのできない人々の営みに関する膨大な記述を残し、第二次大戦前後からのアメリカの戦略研究として出発した「エリア・スタディーズ」も、ほどなくしてアジアやアフリカの多くの地域の人々の視点を重ねながら、アメリカの価値自体を相対化させることになつた。テロリズムを批判しつつ、なお一元的な「民主主義の勝利」論を批判するといふ難しい足場に踏みとどまったのも、現社会のダイナミズムと複雑さを知り、そしておそらくそのことに共感してきた多くの地域研究者だった。

研究者と対象地域との間の非対称な構造と、知

的営為が本来的にもつ、発見し共感し理解しようとする衝動。他者の社会を理解し記述しようとする試みに内在するこの二つの必然の間の緊張関係こそ、おそらく地域研究というアブローチの性格をかたちづくるものである。地域研究は、「そこにある空間領域」を所与として記述する研究ではけつしてない。たとえそのように始めたとしても、ある「空間領域」と向き合う時間のなかで遅かれ早かれ、問われているのは対象の空間領域だけではないことに気づかされるだろう。目の前にある空間領域を叙述するには、身につけてきた理論、言葉、感性だけでは不十分、自らの社会を相対化することなしに、ある地域を叙述することは不可能と。地域研究は、他者を理解しようとする努力と発見の面白さに支えられながら、自らの歴史性と他者との交錯する地点を見定めようとする長い努力の過程であり、すぐれて目的意識的な知的営為の総称である。その意味において地域研究は、まさに「方法として」存在する。地域研究にとつて、「方法としての地域研究」の自覚的な実践こそが、その危うさを超えて他者とのつながりを見出す方

途であろう。九・一一を経て、またグローバル化のなかで「地理の終焉」（所収のテッサ・モーリス・スズキ論文を参照）と呼ばれるほどまでに地域社会が大きく変容するなかで、今、そのことがあらためて問われている。

「方法としての地域研究」——本特集は、その再考のための試みである。所収された論考は、いずれも特定の「地域」に関する研究や経験を土台としているものの、通常の地域研究論文のように特定地域そのものを論じたものではない。また地域研究に関する何らかの普遍的な議論を導こうとするものでもない。特集の目的はあくまでも、「方法としての地域研究」を、それぞれの研究の経験を通じて考えることにある。特集の企画にあたっては、地域研究の内外から「方法としての地域研究」をあぶりだすことを試みた。例えば冒頭の座談会「研究室からフィールドへ」に参加して下さった石田紀郎、原田正純、平松幸三の三氏は、いずれも自然科学系のバックグラウンドをもち、その専門的知識を通じて国内外の様々な地域に関

わっている研究者であり、おそらくご自身を「地域研究者」と任じられたことはなかったと思う。

その座談は、地域研究の大きな可能性を示すとともに地域研究に対する厳しい批判ともなっている。同様に、ブック・レビューでは、それぞれの評者にとつての地域研究の最良の「作品群」を上げていただいた。取り上げられた書物の多様性は、そのまま地域研究のもつ広がり、同時にある種の曖昧さと混乱も示している。

さて、「方法としての地域研究」の最初の、そしておそらく最終的な問題は、研究対象として特定の「地域」を切り取る意味は何か、そもそも「地域」とは何か、ということであろう。

地域研究が何らかの空間領域を「切り取り」可能な実体的なものとみなしてきたことは事実だが、その「地域」概念自体について何らかの共通認識があるわけではない。特有の文化的な類型によって地域概念を構成する立場もあれば、地政学的な世界認識で区分する場合もある。また二〇世紀後半以降になると、多くの場合、国民国家が、事実

上の研究の編成区分の単位とされてきた。例えば、インド亜大陸は、文化を中心としてみればインド世界あるいは「ヒンドゥー」世界となり、地政学的には南西アジア／南アジア、国民国家ではインド、パキスタン等々の国名が並ぶ。イスラーム世界、中東あるいは中近東、そしてエジプト、イラク、イラン等々という組み合わせもあるだろう。

もちろんそれぞれの概念には、ミクロなコミュニティあるいは末端の行政単位に至る様々な段階があり、同質性の高い小単位を地域研究の対象とすべきだとする研究者もいれば、国家、もしくはさらに大きな地理的単位や「文明単位」から敷衍する立場もある。今後、地域共同体が実体を強めるなかで、EUなども研究対象として重要性を増すだろう。また、人間の営みの基礎として、生態系や自然環境を含めた地域概念の試みもある一方で、自然条件の規定性について懐疑的な地域概念もある。

こうした単純な例にも示されるように、「地域」は、何らかの前提となる枠組みがあつて初めて「切り取られ」、対象化されるものである。ただ、

地域研究がそのことにとどまらず自覚的であったかについては、多くの疑問が残る。テッサ・モリー・ス・スズキ論文が指摘しているように、地域研究は、いったん地域を対象化するとそのなかに閉塞し、他の「地域」と共通し相関する事象を過小視してきたことは否めない。また、異なる前提をもつ地域概念を曖昧かつ便宜的に混同しがちであることも見逃せない事実である。イラクという「国家」の専制政治を「イスラーム」の文脈から断罪したり、あるいは調査地の事例を無前提に拡大して国家像を形成したり、といった数多くの例はあらためて述べるまでもないだろう。

しかし同時に、地域研究にとつての「地域」は、研究者が設定する課題と枠組みによつて切り取られる単なる客体ではない。白杵陽が、自らの研究履歴のかたちで述べているように、研究者が設定した地域（白杵の言葉でいえば「思い入れ」が切り取った地域）は、現実の地域と接し、地域に関わるなかで再設定を迫られる。「イスラエル／パレスチナ」という「」付きの地域を設定し得たとき、白杵にとつてこの地域を対象とする研究は、

イスラエルという国家の内と外を連続的にとらえ日本までを射程に含むものとなった。座談会のなかでは、医師である原田正純がまったく別の角度から同じことを述べている。有機水銀中毒の研究に携わった原田にとって、研究対象はまず「患者さん」である。しかし「患者さん」の疾病に取り組む過程で患者さんの生活全体を視野に入れようとするなかで「水俣」という地域が対象化され、「水俣」を対象化すると、アマゾンやカナダにまで連なる課題の広がりとは有機水銀中毒という疾病の全体像が見えてくる。研究の課題もアプローチのあり方も、患者さんの生活する場の総体としての対象「地域」の設定によって新たに展開するのである。こうした地域の設定は、場合によっては国境を越え、あるいは地続きの空間領域ではなく、世界の切片のいくつかを横断しても設定されうるものである。

地域研究と分野別研究における「事例実証研究」と分けるのも、この「地域」設定と研究の深化が感応しながら変化するダイナミズムにある。

「地域」は研究対象として客体であるだけでなく、

それ自体が主体でもある。臼杵や原田が指摘するこのダイナミズムは、地域が発信するメッセージが既存の研究の枠組みの限界を打破しうることを示している。同時にそれは、地域を理解し叙述するのは誰か、という「方法としての地域研究」のもう一つの課題を提起する。対象とする社会に生活する人々、自社会を研究対象とする研究者、そして外側から入り込んでいく研究者。地域が発信するメッセージは、同じように作用するのだろうか。それともそれぞれの役割があるのだろうか。

先述の臼杵にとって、地域を対象化しうるのは研究者の（外来者であるからこそ可能な）「思い入れ」であり、思い入れのない地域研究はありえない。外来者性は自明であるだけでなく、外からの照射を可能にする不可欠なものである。臼杵が度々言及する自社会を研究する研究者たちへの共感、違う場に立ちながら同じ対象を見つめる距離感と親密さの間で揺れるものであろう。一方、やや若い世代に属し地域研究者として長い期間を研究対象地域で生活した経験をもつ山本博之は、マレーシア・サバ州のバジャウ人社会の叙述を

ぐる、バジャウ人研究者、マレー人研究者の関係を取り上げながら、「研究対象との距離」と「議論の説得性」の結びつき方を論じ、研究者が「外来者を自覚しながら対象地域と関わろうとする努力」が、地域研究を広く開かれた研究とし、地域をその「一部」として含む「全体」に通用するものとしうると論じている。同じく地域研究者の「外来者性」のもつ意味を指摘しながら、山本にとって外来者性は自明のものというよりむしろ「自覚」すべきもの、と認識されている。「方法としての地域研究」という視点から見れば、地域研究は地域に密着しつつ、なお「外来者性」に踏みとどまることにおいて成立するといえるだろう。

では、外来者である地域研究者は、どのようにして地域の発信するメッセージを捉えることができるのだろうか。この点については、本特集でも様々な立場の意見が述べられている。座談会では、専門家として特定地域で発生した疾病や公害などに関わる研究者、とくに自然科学系のバックグラウンドをもつ研究者にとって、問題に取り組むという共通の目的が、地域を理解しようとする原動力

力であり、地域社会への共感の基礎となることが強調された。地域社会への接近は、専門領域の要求する現地でのデータの蓄積、および地域住民（多くの場合は何らかの「被害者」）からの直接的な聞き取りと観察、つまり現地調査が出発点である。一方、山本は、現地調査は、現地語資料調査を含む多面的な接近の一つとして位置づけている。「見て聴く」ことの重要性は否定しないとしても、「見て聴く」ことだけに傾斜することの危険性を指摘しているのである。

この点は、地域研究の「資料・データ」の問題とも関連している。いうまでもなく資料やデータは、その形成、保管や整理、そして公開のあり方などすべての過程で、地域をめぐる過去と現在の様々な力の構造を反映している。その資料・データの性格を批判しつつ、どのように研究に生かしていくのか。資料・データは誰に帰属すべきものか。誰に残していくべきものなのか。資料・データの構築において、地域研究者の役割は何か。こうした問いは、先に述べた地域研究にとっての「地域」の意味、あるいは地域研究の主体の問題

と切り離せない根幹に触れる問題である。本号では、特集「地域研究資料の新地平」として、この問題を取り上げた。とくにデジタル技術の進展を前提として、新しい資料保存のあり方や、それを前提とする資料・データの共有の可能性が開けつつあり、今後の展開に注目したい。

本特集が問いたい「方法としての地域研究」の最後の課題は、その社会的役割、換言すれば実学としての地域研究のあり方である。地域研究が地域の発信するメッセージを受けて展開するのであれば、地域に生起する現象や課題、とくにその困難に対して、何らかの理解の枠組みを示す責務がある。また長年親しみ、多くの友人が暮らす研究対象地域が困難な状況にあるとき、それぞれの方法で具体的な支援、あるいは支援活動と現地をつなぐ橋渡し役を果たす研究者も少なくないことは、先のインド洋地震・津波災害時にも示された。本特集では、石井正子論文が紛争や災害など緊急支援時に現地の事情に即した支援体制を短時間で構築するために、現実的な連携を実現する必要性を論じている。また座談会では、水俣や沖繩米軍基地

の騒音公害をめぐる裁判など具体的な経験を通じて、専門家が「役立つ」ためには、「専門領域」の知識だけではなく、住民グループや被害者、あるいは他の専門領域との協力を通じて、裁判や補償交渉といった様々な論理や力が作用する場で通用する力をつけることの重要性が指摘された。研究という場で蓄積される学術知は自動的に「役立つ」のではなく、他者と連携を求める研究者の意識的な行為を経て実践につながる。

ただしこの研究者の意識的な行為については、支援活動や政策決定などについて直接的に関わることへのためらいや懐疑的な傾向があることも事実である。その背景には、研究者が地域社会に対してある種の「外来者性」を保持しようとすること、また地域社会の構造や歴史性を知るゆえに直接的な関与がもたらす複雑な結果を予想しうること、といった消極的な理由だけでなく、対象地域社会の危機からの回復力に対する信頼や安易な外部からの介入が、その回復力を阻害することへの怖れも指摘しうるだろう。いうまでもなくこの際の「地域」社会とは、海外に居住するコミュニテ

イからの支援のように、場合によっては空間的領域を超えて世界に無数に張り巡らされる無定形の「地域」も含んでいる。

「方法としての地域研究」という課題設定からみれば、地域研究は何よりも「地域」に生きる人々への信頼と共感を原点として、その社会を理解し提示しようとするアプローチである。テッサ・モーリス・スズキ論文が言及しているように、かつてJ・H・スチュワードは、異質な文化に理解可能な「一貫した特有のパターン」を見出すことが他者に対する「寛容」をもたらすと論じた。おそらく今日の地域研究は、地域のなかに「一貫した特有のパターン」よりも、矛盾をはらみつつ変容する同時代性を見出すだろう。そのとき地域研究が社会に還元しうるのは「寛容」ではあるまい。他者を理解しようとする試みが、簡単に「理解」を実現すると考えるのも非現実的である。ただ、「方法としての地域研究」の自覚的実践を通じて、わたしたちは今よりも「謙虚」になりうるはずである。謙虚に他者のメッセージを聞き取るうとすること。それが共存という大きな目標への

第一歩であるならば、地域研究は今、ますますその存在意義を増している。

(押川文子)